# 零崎冒識の人間具合

光軍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
零崎冒識の人間具合

【Ｎコード】
Ｎ２４３３Ｗ

【作者名】
光軍

【あらすじ】
《零崎一賊》――――それは“殺し名”序列第三位に列し、理由なく人を殺す殺人鬼の集団。　殺人鬼・零崎冒識（ぜろざき・おかしき）はそんな零崎一賊の中でも成り損ないと呼ばれた零崎。※まだまだ未熟者ですのでキャラが崩壊していたり話の都合上死んだ筈のキャラが生きていたりします。又若干話の流れが違ってたりしますかもです。

## エピローグ（前書き）

西尾維新さんの作品での二次作は初投稿です。

最近、設定とかがないがしろになれてるモノが多い気がしますので、

そこら辺の事には気を付けようと思います。

ではでは、どうぞ

# エピローグ

某県、某市の某所にあるとある一軒。

それは普通で普通な普通の普通を絵に描いたようなごくごく普通な家。その普通な家の、これまた普通の一室。その部屋は置いてある家具の大きさや部屋自体の広さからどうやら子供部屋のようだ。

そこには家具以外にも何か影のようなモノが二つあった。いやその影は人の形をしている――――まあ人間である。　一人はベッドに座り一人は向かい合うようにその前に立っていた。見た目からするとその二人とも男のようである――――いやベッドに座っている一人は、そのまだ小さな体躯からして男と言うより、どちらかと言えば少年の姿であった。

そしてその二人が立っている床、そして二人の周りを囲む“壁”。それら全てが真っ赤に染まっていた。　元々この部屋にあった壁紙や床が見えなくなるほど真っ赤に真っ赤になっていた。

――それは血だった。

その部屋は床全体に血の海を作り、部屋中が血だらけだった。

その部屋は――――――普通じゃなかった。

よく目を凝らしてその部屋を見渡してみると、二人以外にも人がいた――――否、それはもはや人とは呼べないだろう。それはこの部屋と同じく真っ赤に血だらけとなった――――ただの肉片だ。人間だったモノが、ただの肉の塊と化したモノだった。

そんな人間だった肉片には気にもせず立っている男は特に問題ない。何も変わらず、眉一つ動かさず冷静（実際冷静かどうかは判断しにくいが）だった。
いや、この状況では逆に問題だ。自分の傍に人間だった肉の塊があるのに冷静でいられる人間を、人は問題ないと言えるだろうか。この場で、この状況で冷静にしている人間を問題ないとは言えないのではないだろうか。
しかし座っている少年の方はもっと“問題”だった。その少年の着ている服。まだ若々しい潤いのある肌。小さな手。幼い顔――――それら全てが真っ赤に真っ赤に真っ赤に真っ赤に真っ赤に真っ赤に真っ赤になっていた――――この部屋の床や壁同様、傍の肉片同様、その少年は――――血だらけだ。

この状況から察するにもしやこの少年は――――いや、これはもう『もしや』、ではないだろう。これは既に決定的だ――――そう確信できる域まできている。
ごくごく普通の家の一室の、真っ赤に血で染まった子供部屋。その部屋にいる全身血だらけの少年と男、人間が二人。二人の傍らに血だらけの肉の塊、人間だったモノが二つ。
いくら子供であろうと、誰が弁解しようと――――この状況を、この場を、この空間を作ったのは目にみえている。

いや――――――まだ確信にはいけない、確実とは言えないモノがこ

の状況には残っている。いくら血だらけの部屋で血だらけの少年がいても、いくらその場に人間だった肉の塊があってもだ――――現時点で容疑者の疑いをかけられている少年は、まだ少年である。死んだ人間を――死体を目の前にして普通でいられる筈がない。ましてや男のように冷静でいられる筈がない。そうもしかしたらその男がやったのかもしれない。少年はこの男に目の前で人間の死を晒されたのかもしれない。そして死の恐怖に怯えながらただ呆然としているだけかもしれない。

だがしかし、そんな儚く少なくなくも希望は少年のその顔に浮かべている表情一つで霧中へと消え去ったのだ――――

その少年は――――ニヤニヤと笑って、笑顔でいた。

おそらく先ほどまで少年にかけられた仮説――――唯一無二だったであろう希望はなくなった。

「――――と、言うことだっちゃ。わかったっちゃか」

と男の方が少年に向かって言う

「――――つまり……どゆこと？」

それに答えるように少年はその外見の年頃に似合わない、邪悪で純朴な表情をしながら首を傾げた

「だぁー！　何度説明すればいいんだっちゃ！　いい加減にするっちゃよ」

「んなこと言われても……よくわかんないんだよ――軋識さん」

そしてその男――軋識は溜息を吐いてから血だらけの少年を見据えた。

「全く。別の零崎の感じがしたと思ったら――――とんだ結末だっちゃよ。オメー本当に零崎なんだっちゃか？」

「さあ？わかんないや。てかさ、そもそも俺って殺人鬼なの？」

「わかんないって……自覚も無しっちゃか。こりゃ面倒っちゃね」

「面倒って何。家賊に引き込め難いとかそういうのだから？」

「んだよ――――ちゃんと一応は聞いているじゃないっちゃか」

「まあね」

少年は再びニヤニヤと笑いだす。　それを変なものを見るかのような目でみる軋識。

しばらく間を開けてから、軋識が口を開けた

「んじゃあちゃっちゃと済ませたいから率直に言うっちゃよ――――――オメー、俺たちの家賊にならないっちゃか」

「いいよ」軋識の誘いにこちら間を開けずに率直に返した少年だった

「……」

「……ん？　どったの？」

「……いやな。なんかこう……もうちょっと自分の中で葛藤があっても良いんじゃないっちゃか？　殺人鬼っちゃよ？」

「無いものは無いんだから仕方ないよ。それにおとーちゃんもおかーちゃんも死んじゃったみたいだし」

再びニヤニヤと笑う少年。

そして少年の台詞を聞いて軋識はチラリと自分の傍にある血塗れの二つの肉の塊を見た

「はあ……まあ良いっちゃ」

「■■■」

と軋識が溜息を吐いたその後に少年は言った。

「あん？」

「ん？　俺の名前言っただけなんだけど？　……さっき聞いた話だと言っといた方がいいかと思って」

「……あぁ、確かに説明したっちゃね。■■■――――か。なら名前はそうっちゃね……お前のその名前にその変におかしな奴だっちゃしから零崎――――――――冒識。

零崎冒識、ってのはどうだっちゃ？」

「冒識……良いね。スゴくカッコいい気がする」
そう言ってニヤニヤから笑顔に変わる少年――――もとい冒識

「オメーなんでそんなに偉そうなんだっちゃ」

「さあ？なんでだろ」

「まあ、良いっちゃ。……とりあえずこいつはレン辺りにでも押し付けてみるっちゃか……」

「やだよ、俺軋兄に付いて行きたい」距離が近いせいか、軋識の呟きが聞こえたらしく冒識は軋識の案を拒否した。

「誰がオメーみたいな変な奴好き好んで連れて行きたいと思うっちゃ……」

「軋兄さ！」

「うるさいっちゃ！」

その後軋識はひとまず仕方なく不本意ながらもその場に居続けるワケにもいかず冒識を連れて、その一室以外は普通で普通だった家を後にした。

これにて彼の人としての物語は終わり、鬼としての物語が始まる。

## エピローグ（後書き）

始めですので、こんな感じで……何か微妙ですかね？

自称：否定人間ですが頑張りながらもゆっくりと書いていこうと思います。

## 夜道の、負い駆けっこ（前書き）

最近ようやっと戯言シリーズを読み終えれました。

今年の3月の頭から人間シリーズから買いながら読み始め、それを読み終えてから戯言シリーズを買いながら読み、刀語を平行させて借りて読み――そして刀語が終わり、戯言シリーズもようやっと読み終わりました。

お金があまりないから時間掛かりましたよ…

ではでは、どうぞ

## 夜道の、負い駆けっこ

「――――――っ」

現在の季節は冬、時刻は虎の刻あたり。
日はとうに沈み真夜中となり、寒い冬空の凍てつく空気と身体を通り抜ける風が自然と頬を刺激する。闇と月が支配する真っ暗闇の夜道――――そこを走る影があった。

「ハァハァ…ハァ……」

その影は走る――――というよりも寧ろ何かから逃げているようであった――――息絶え絶えになりながら逃げてるように見える。
実際その影は――――――いや、逃げているという時点でそれは人間だ――――――その人物は逃げているのだ。

それもそのはず、逃げている人物の数メートル後方にはその人物を追い掛けている者がいたのだ。

その手に一振りの刀を持って――――

「――――――チッ、逃げ回んじゃねーよ。殺せないじゃんかよぉ！」
前方で逃げている人物に向かってそんな事を叫びながらいたのだ。
その者は一見イライラしているようにもとれるが、その顔は――――――ニタニタと笑っていた。

「ゼェ…ゼェ……」

後ろから聞こえる声には反応せず、ただ逃げ回っていた。戦略的撤退……などと言う言葉は似付かわしく無い程、惨めに逃走遁走脱走奔走――――駆けずり回っていた。

因みに逃げ回っている人物はジャージを上下に着た動き易そうな格好をした男性……否、青年。
それを追い掛けているのは――――全身を真っ黒いスーツで身を包んだ、こちらも男性。若そうだが青年という程でも無いが、かなり若そうな風貌である。

「――――まぁった殺し甲斐の無さそうなの見つけちまったなぁ……他の奴らに何と言われるのやら――――――まっ、そんな事言っても別に関係ないんだけどな」

スーツ姿の男はそう呟くと、一気にペースを上げて走りドンドン青年との距離を縮めて行く。

「ハァハァ…ハァ……んなっ」
スーツ姿の男はジャージの青年とのかなり――――とまでは言わなくともそれなりにあった筈の距離を、それを何でも無いかのようにいとも簡単に詰めていったのだ。

そして、片手に持っている刀を振り上げて――――

「ひゃっは」
笑い。ジャージの青年へ――――青年の脳天目がけて、振り下ろす。

「っ――――！」
間一髪――――とは言い切れないが、刀は青年の脳天を直撃する事はなかった。
しかし肩口を軽く斬られたのだが青年は身体を横転させる事で振り下ろされた刀を避けたのだった。

まず刀と言うモノは切ることが大前提だ。縦横斜めと切り方は様々だが――――中でも刀を振り上げてからの振り下ろしは高威力だがかなりのタイムラグが生じてしまう。それは振り下ろす為には刀を一度上へと振り上げなければならないからだ。刀はそれ一本でも相当な重量がある、だから振り下ろしというのには高い威力を有する。しかしその行為には問題がある。刀というその鉄の塊たる重量を振り上げるのにはかなり力が必要とする、更にただ振り下ろすのにも力がいるのだ。だから振り上げて、一度上げたままで刀を制止させてから、振り下ろすという動作が必要なのだ。
一度振り上げる必要がいるならば、最初から下から振り上げる方がよっぽど早いし力も先のよりさほど必要としない。なので刀を振り上げてから振り下ろす、という一連の流れ――――動作を行うまでに刀の存在を後ろからでも気付く事が可能であるのだ。

そういうワケで青年はスーツ姿の男の攻撃を間一髪といった形で避ける事が出来たのだった。

――――閑話休題。

「ははははっ――――」

「ハァ……ぐっ――――ちっ…っくしょう…」

しかし一度くらい避けたからといって――――だからといってそこ

から形勢や立場、何かが変わるワケでもなく寧ろ避けた所為で走っていた時の勢いは殺され更にスーツ姿の男は振り下ろした後、直ぐ様返す刀でジャージの青年へと追撃猛撃を繰り返したのだった。

そして青年は走りながらその身を捻りつつ刀の直撃を避けてはいるが、反撃する術もなくジャージの至るところを切られ皮を裂かれ頬を斬られるのみだった。

冬空の下、凍てつくような空気と冷たい風が切り口に痛むが――――そんな事はお構い無しにただただ逃げ惑っていた。

しかし、この逃走劇もそろそろ終盤を迎える事となった。

「ぜぇ…ぜぇ……ハァ……っ！！」

青年は男が刀を大振りするのに気付き、その隙を突いて突き当たりの角を曲がり一気に男を突き放そうしたのだが……

「……っ。畜生…」

その角を曲がった先は――――左右の壁に挟まれ真ん前の壁に進路を閉ざされた――――周り三方を囲まれた行き止まりだったのだ！

進める道は――――進路は来た道のみ！　青年は直ぐ様身体を翻し来た道を戻ろうとするが――

「――――は～い。追い詰めた～」

――――そこには片手に刀を持ちスーツを着た、凶悪そうな笑みを浮かべ真っ赤な下を出した男がいた。

「――――っ！」

まさに絶体絶命！　逃げ道も無い、進退これ谷まる――――進むも退くもできはしない！

周り三方に囲まれたまさに八方塞がりならぬ三方塞がり！　――いや男が最後の一方を塞いでいるので四方塞がりだろうか。

とにもかくにも、危急存亡の秋！　前方の殺人魔、後方の壁！

千里の野に殺人野郎を放つ！　通り魔に通行人！　一触即発危機一髪、薄氷を履むが如し！

「……なぁ、一つ訊いても良いか…」

と、こんな場面で青年は恐らく男に向かって言う。

諦めか、それとも他の何かか――――虚ろな目をしてそう言ったのだ。

「あん？　どーせ今から殺されるんだよ――――まあ別に良いか。俺の心は広いからな……何だ」

恐らくこちらは気紛れだろう……どうせ何も出来やしない、後は軽く殺せば良い話なのだから……といったところだろう。まあ実際そうである。

「ふぅ……、……アンタ、何で人殺しをするんだ。何か理由でもあるのかよ…」

青年は乱れた息を整えそう言った。きっと自分には何か殺される理由があるのだろう、そう思ったのだ。いや、そう思わなくてはやりきれないのだろう。だからそう男に訊ねたのだ。

しかし、男の答えはそんな考えをまるっきり無視する形で裏切った。

「はぁ？　殺す理由ぅ？　ははは、そんなもんあるかよ。理由なんか無いさ、殺したいから殺す――――ただそれだけだ」

「……………、…………、……そうかい」

「………？」

青年のなんとも言いがたい返しに男は首をかしげたのだが、別段興味も無く少しの疑問も直ぐに払われた。

「まあ………痛みはないように一瞬で往かせてやるからよぉ！！」

そして男は刀を振り被り、言葉通りにする為か青年との距離を詰めるべく思い切り走って行った。

――――その時、男はいつの間にか青年の手に黒い棒のようなモノが握られている事に気付いたのだが、やはり別に問題なく特に気にする事もなくそのままの勢いのまま刀で青年の心の臓もろとも肩を斬るべく振り下ろした。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇
◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

後日、例の路地裏で誰にも知られず何者にも気付かれずひっそりと原形がないほどになり、それこそ肉片と血液を三方の壁と一方の道に撒き散らしてぐちゃぐちゃになっているという状況だった。
そして其処にはその他には誰も何もなく――――その場と同じように血で真っ赤に染められた見るに無惨なスーツが一着、あるだけだった。

## 夜道の、負い駆けっこ（後書き）

何か今回もアレでしたね…

しかし次回はあの人がご登場！

――――するかも……多分、はい…

では、何かありましたら感想板の方へよろしくお願いします。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2433w/

零崎冒識の人間具合

2011年10月9日15時36分発行